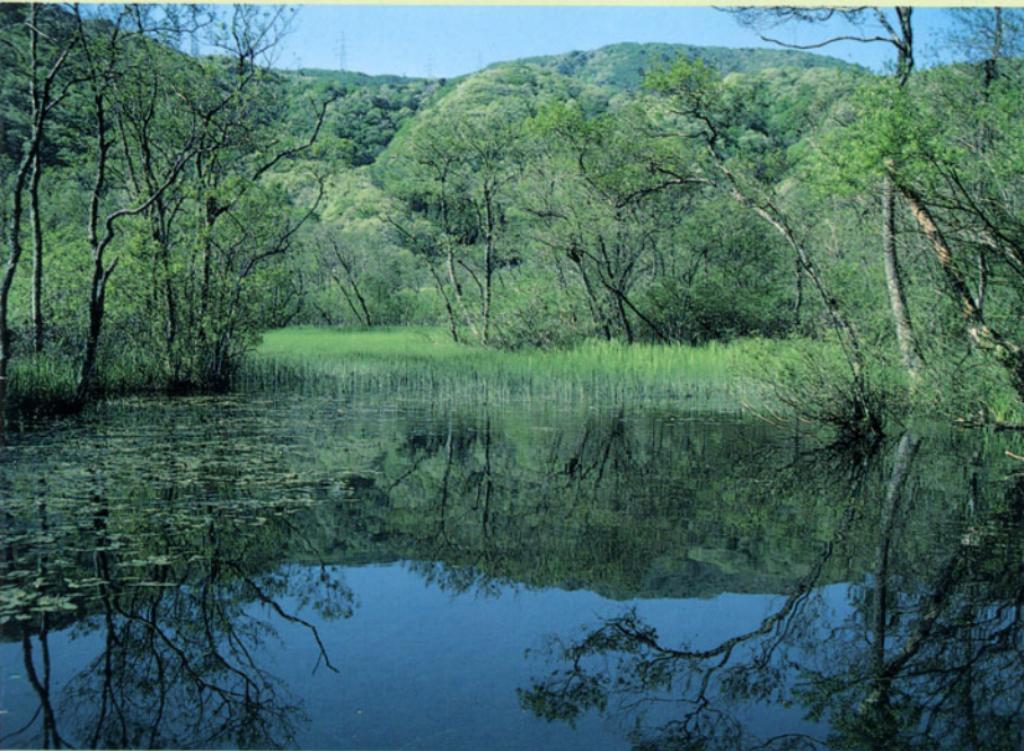


— 第6号 —
福井の湿原

ふるさと 福井の自然



福井県

はじめに

湿原という言葉を聞くと、じめじめしたところとか底なし沼といったイメージを持つ方が多いのではないでしょうか。実際、湿原は水に浸り、ヨシやスゲが生い茂り、直接足を踏み入れることが難しいところも多くあります。そこに人間が住むとなれば、湿原は過酷な生活環境だといえるでしょう。

しかし、特異な環境であるがゆえにそこに暮らす生き物たちは、その環境に見事なまでに適応して生活しています。また、湿原には決して他の環境では見ることのできない生き物が多いということも事実です。そして、私たちが湿原を正しく認識し、大切に守っていけば、気軽に自然と親しみ、野生の生き物と触れ合う機会を湿原は提供してくれます。

ただ、以前にはあちこちにあった湿原も治水工事や水田の整備などで少なくなり、現在、福井県でも湿原とよばれるものは、数えるほどになっています。それにともなって、そこに住む生き物たちも姿を消し始めています。このような中で、現在、湿原が水の浄化装置であることや湿原に住む小さな生き物が地球の生態系のカギを握っていることなど、その重要性が見直されてきています。

そこで、この貴重な湿原を守っていくため、今回の「ふるさと福井の自然」は、福井県内の代表的な湿原やそこに生息する生き物たちを紹介しました。この冊子が、湿原の大切さを認識し、私たちの生活と共存していくための手助けとなれば幸いです。

平成4年3月

福井県自然保護センター
所長 田辺 甚兵衛

表 紙：池ノ河内 阿原ヶ池（敦賀市）

湿原の移り変わり

ナチュラリストリーダー 松村 敬二

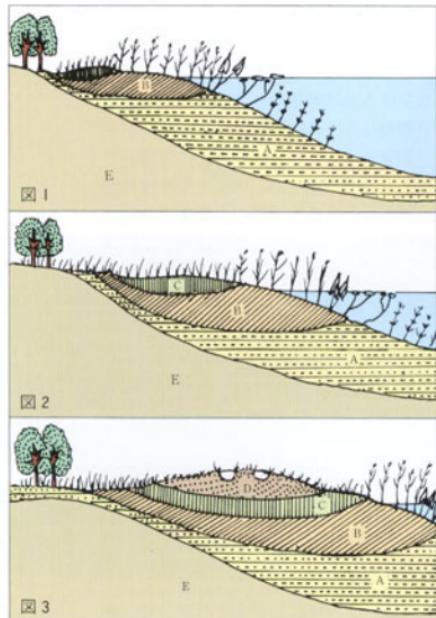
湿原には沼沢湿原と泥炭湿原があります。泥炭^(注1)湿原は、低層湿原と高層湿原に分かれ、その移り変わりの湿原を中間湿原といいます。

◎低層湿原（図1）

西南日本に発達している湿原で、特別な場合を除くと、水が地下水によって補給される湿原です。県内では池ノ河内、池ヶ原湿原がこの代表です。図1のように池の周りにはスゲ類が群落を作り、水辺にはヨシ群落が茂っています。少し深くなると、ミツガシワ等が群生し、その間には、ミソハギ、サワギキョウ、ヤナギトラノオ、ギボウシ類などが生えています。北の地方や高地では、ヨシがなく、スマガヤ、ミズバショウ、ニッコウキスゲ等が優占することもあり、またオオミズゴケが群生することもあります。このように低層湿原の代表群落はヨシとスゲの群落です。

◎中間湿原（図2）

低層湿原から高層湿原への移行型の湿原で、スマガヤが代表的な群落です。その他、ワタスゲ、ヤチスゲ、ヤチヤナギ、レンゲツツジ、ニッコウキスゲ等が生えています。この植物が繁茂すると、細かい根や地下茎が多いので排水を悪くし、ひとくじめじめした草原をつくります。その後、イボミズゴケ、イヌノハナヒゲのような限られた植物が大群落をつくり、ますます呼吸や排水を悪くして強い酸性の泥炭層をつくり、高層湿原になりやすくなります。



A-湖岸 B-ヨシ泥炭 C-スゲ泥炭 D-ミズゴケ泥炭 E-母岩
湿原の移りわり（図1→図2→図3）

冷涼な地域の湖岸では、時間が経つとともに厚い泥炭層がつくりられて低層湿原から高層湿原へと、湿原が変化していく。それとともにヨシ草原→スゲを中心とした草原→ミズゴケ湿原へと変わっていく、生育する植物の種類も変わっていく。

◎高層湿原（図3）

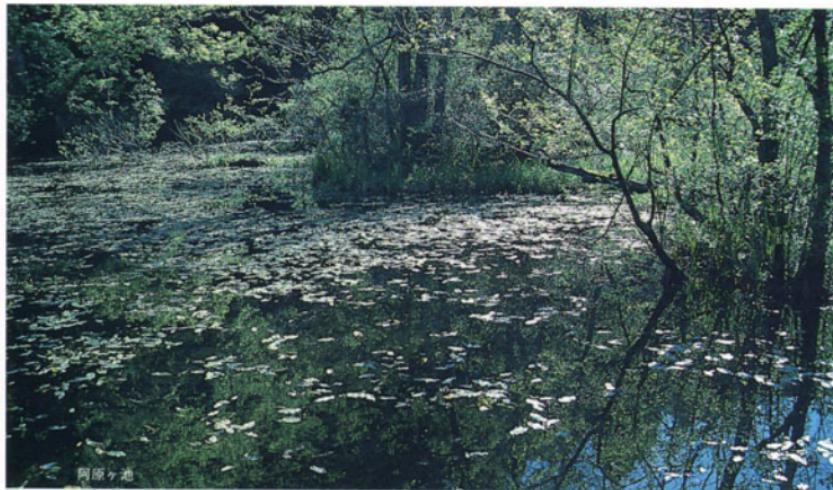
本州中部の高山や北の寒い地方には、高層湿原だけに生育するミズゴケ類が生えてきます。そして凸レンズ状の地形を作り、そこに雨水がたまり、ミカヅキグサ、ハリミズゴケ等が生えて凹地を作ります。凹地がつながると池になり、その中には凸部の島のような地形ができます。ここにはムラサキミズゴケ、チャミズゴケなどが生えます。このように高層湿原は雨水だけで凹凸状の湿原ができます。図3のように高層湿原の中にも、低・中・高層湿原がモザイク状に分布しています。西南日本では、泥炭層の分解が早く、中間湿原どまりが多いようです。日本海側の多雪地帯は、低層湿原の期間が短く、イワイチョウやヤチスゲ等の雪田草原^(注2)による泥炭質土壌の上に、高層湿原ができるています。県内唯一の高層湿原である赤兎山の赤池は、こうしてできたのです。

(注1) 泥炭は、園芸店では、ピートモスの名で売られています。寒い地方で、スゲ類などの細かい根がくさらずに、炭のようになったものです。

(注2) 日本海側高地の雪のふきだまりは、長い残雪期間をつくり変化していきます。これを雪田草原といいます。

（まつむら けいじ 勝山市元町3-6-48）

福井の主な湿原



すてきな池ノ河内

ナチュラリストリーダー 柴田亮俊

池ノ河内湿原は、敦賀駅から東部へ数キロの滋賀県境近くの標高300mの所にあります。近くにある唯一の集落地池ノ河内は、かやぶきの家やはさかけの見られる昔ながらのどかな風景です。しかし、冬は雪が多く孤立することもあって、過疎化の波には勝てず、現在の戸数は9戸に減少しています。

ここは、極めて自然度の高い貴重な自然環境と植生を保護するため、阿原ヶ池を中心とした湿原とその周辺を含めて111ヘクタールが、昭和52年に県の自然環境保全地域に指定されました。福井県の自然環境保全地域は、ここと池田町の橋掛のブナの自然林の2ヶ所だけで、自然に恵まれた貴重な動植物の宝庫となっています。

池ノ河内湿原の生成



池ノ河内湿原の地質は、粘板岩あるいは砂岩を基盤とする古生層ですが、花崗岩の貫入や断層が一部にまじる複雑な構造で若越破碎帯に属します。

そして、このような沼地を構成する盆地生成の原因は、池ノ河内が南北方向の断層と西北西-東南東方向の断層の交叉地点にあたるため、地盤が砕けて沈下したものと見られています。

この湿原の北西側は山がそり立っていますが、東と南から川の土砂が流出して小規模

な扇状地を形成したため、南東部の流出口が埋められ、水がたまって沼地ができました。これが、湿原の中心にある阿原ヶ池です。池は5ヘクタールの広さを持っていますが、その90パーセントは浮島になっています。ここは、かなり広い範囲からの涌き水と周囲の山から流れ込む山水によってうるおい、敦賀湾に流れ込む一番大きな川の笙の川の源流になっています。

この池は、昔はもっと広かったわけですが、池の北西部はオオミズゴケを中心とする植物が枯死堆積してヨシがはえ、さらにそのヨシ原にハンノキやハイイヌツケなどがはえてハンノキ林が広がり、池が次第に狭められています。

池ノ河内の四季

一般に湿原は栄養に乏しく強い酸性の水で養われており、湿原特有の湿生植物が群生します。この湿原には、北方型の植物であるヤナギトランオ、ヤチスギラン、ミズドクサ等をはじめ、多数の湿生植物が生育しています。

5月末になると、柄のある短い円筒形の花序を出し、多数の小さな黄色の花をつけるヤナギトランオは、福井県唯一の自生地でわが国の南限と見られています。ヤナギトランオは北半球の亜寒帯に広く分布し、北海道、本州北部の山地湿原に稀に見られる珍しい植物です。

池ノ河内が福井県唯一の自生地となる植物は、この他にもその分布が我が国の南限のミズドクサや日本海側の西限にあたるヤチスギランがあります。

また、氷河期の遺存種ミツガシワやヒメザゼンソウの大群落も見られます。春が訪れる一番に、ヒメザゼンソウは池の東側湿地一帯にウバユリの葉のようなやわらかい若葉を出します。そして、この葉は5月末から6月末にかけて枯れた後、花の形がミズバショウに似た紫色の花をつけます。



ヤナギトランオ



ミツガシワ(手前)とミズドクサ(奥)



ヒメザゼンソウ

このような春の変化の中で、黄色のジュウタンを敷きつめたような光景を見せてくれるサワオグルマは見事です。そして、フジの花や、ヤブデマリ、コブシの花が咲き競い、統いて何万本ものカキツバタが濃紫色の花を一面に咲かせます。

梅雨も終わり頃になると、コバギボウシが一面に花を咲かせます。コバギボウシは薬の調合に使う細いさじに似た形の葉をつけるのでサジギボウシとも言われています。7月の終わり頃からうす紫色の花をたくさんつけます。



サワオグルマ



コバギボウシ

9月から10月にかけては、マアザミやオオニガナ、サワギキョウと秋の草花が目を楽しませてくれます。マアザミは敦賀・三方植物区が県内唯一の生育地です。普通のアザミとは違って、花が釣り鐘のようにたれさがって横向きに咲くのが特徴で、その形からキセルアザミとも呼ばれています。サワギキョウも一面に咲くと美しい景観を見せてくれます。その濃紫色の唇形の花は、上唇が二深裂、下唇が三浅裂し変化に富んだ形をしています。

このように池ノ河内の四季は、様々な植物によって彩られます。



マアザミ



サワギキョウ

カキツバタにまつわる伝説

昔、この阿原ヶ池に雌の大蛇が住んでいました。池に住む小さな動物や水鳥たちが大蛇のえじきになり、獲物がなくなると周辺の野山に出て人間の赤子まで飲み込み、田畠も荒し回りました。困り果てた村人は、お宮にお参りをし、このさわぎが静まるよう祈願しました。この雌蛇が立派に成長すると、裏山を越えたところの夜叉ヶ池に住む一匹の雄蛇の所へお嫁入りしました。何匹かの子供もできて、毎日楽しい日々を過ごしていましたが、ある日一人いたときの阿原ヶ池が恋しくなり、子供たちを連れて里帰りすることになりました。山を越え、阿原ヶ池が眼下に見えたとき、大蛇ははっと驚きました。池の中一面に刀が突きたっているではありませんか。鋭く磨いた刃先が水面に何万本も。大蛇は変わり果てた池を眺め、弱々しく泣きながら夜叉ヶ池へ、すごすごと帰ったと伝えられています。

この刀のように見えたのは、実は、カキツバタの若葉（写真右）であつたということです。



おわりに

澄みきった冷水をたたえるこの池には、前述のような神秘的な伝説が語り伝えられていくと同時に、標高300mの山地で生活する地区民にとって、池の水は命の綱とするほど大切な水です。それ故、地区の古の話では「私が子供の頃は、阿原ヶ池は大蛇の住む聖域として足を踏み入れなかつた。」と言い、魚つりや不浄な行為をすることは固く禁じられていましたと言います。

平成元年には、この湿原に観察用の全長800mに及ぶ立派な木道と山側には遊歩道が設けられ、市民の関心も高まり、昨年5月にはNHKのモーニングワイドで、北陸の尾瀬として全国に紹介され、一躍脚光を浴びることになりました。

また、自然保護団体や地元の人たちの呼びかけで、ジュースの空き缶やタバコの吸い殻一つ落ちていないということが、ここでの自慢となっていきます。

このような地元の人たちの気持ちを踏みにじるような行為を改め、ここの池ノ河内の自然を守り後世に伝えていきたいものです。

（しばた りょうしゅん 敦賀市
若葉町21-7）





美しいミドリシジミの雄

昆虫類から見た池ノ河内湿原の重要性 大阪市立自然史博物館 宮 武 頼夫

池ノ河内湿原は標高300m余りで、西日本では低山地といったところですが、冷温帶(アナ帯)やそれ以上の標高の山地にすむ昆虫が多く、東北日本型の種類や寒地系の種類も見られます。蝶では、ダイミョウセセリの関東型、ヤマキマグラヒカゲなどがその代表で、ホシチャバネセセリ、ウラキンシジミ、ウラクロシジミなどがあげられます。トンボ類では、コサナエやルリボシヤンマなどが重要です。

尾花(1969)は、ルリボシヤンマの研究から東北日本に分布する種(たとえばコサナエやルリボシヤンマ)の西南日本への侵入口、また西南日本に分布する種(たとえばハネビロトンボ)の北への通り道、すなわち「湖北回廊」(教賀回廊)として池ノ河内の性格を述べています。非常に興味深い視点ですが、なかなか検証できるものではなく、反論する人もいます。しかし、少なくともこの地域が昆虫の移動や、東北日本型と西南日本型の昆虫の分布を考える場合に、重要な岐路や境界であることはまちがいなく、鋭い指摘にはちがいありません。水系としては、南は琵琶湖へつながり、西は三方五湖を経て中国地方につながる場所に、池ノ河内湿原は位置しています。また、山系としては、野坂山地を経て比良・丹波山地、さらに播州高原を経て西は広島県までの中国山地へとつながり、南は伊吹山地、鈴鹿山脈、台高山地から紀伊山地へとつながっています。このような岐点に池ノ河内のような条件のよい湿原が存在することは、トンボのみならず水辺や湿原などの環境に生息する昆虫類の移動や分布拡大には、非常に効果的です。過去には湿原の状態がどのように変化したか分かりませんが、現在においてもその存在意義は大きいと考えられます。

当湿原は、湿原性の昆虫の種類が豊富で、珍しい種類が多いことは、よく知られています。キヌツヤミズクサハムシやツヤネクイハムシ、サラサヤンマ、オオエゾトンボ、ハッショウトンボ、クロスジチャイロテントウ、ムナグロチャイロテントウなど、あげればきりがありません。ミドリシジミの豊産と周囲の良質の落葉樹林を含めてゼフィルス類の種類をかなり産するなど、湿原の昆虫には限らず、昆虫が非常に多いところです。現在の状態が保たれて、これらの昆虫たちがいつまでも守られるよう願っています。



湿原の重要な水源 阿原ヶ池 フトヒルムシロが茂り、
ヤスマツアメンボやタカネトンボのヤゴが多い。



ハンノキなどの高木層、ヤナギ類などの低木層、ヒメシロネやスゲ類などの草本層、開水面など多様な環境が入り混じっているので、豊富な生物相が見られる。



コサエの雄



コサエの雌



小さいが美しいモートンイトトンボの雄



羽化中のタカネトンボの雌

調査協力・写真提供者 井上 清・一井弘行

参考文献

長田 勝 (1975)「敦賀市池河内のチョウ類・トンボ類採集記録」。福井市立郷土自然科学博物館博物同好会々報。(22):23-29.

長田 勝 (1980)敦賀市池河内産サトキマグラヒカゲの訂正。同。(27):64.

尾花 茂 (1969)ルリボシヤンマの分布を追って(1), (2)。Nature Study, 15(11):7-10, (12):6-10.

日浦 勇・尾花 茂 (1969)湖北トンボ探索記(1969年6月15日)。Gracile, (9):6-10.

福井県 (1976)福井県自然環境保全基礎調査報告書:110.

(みやたけ よりお 大阪市東住吉区長居公園1-23)



ミツガシワの咲く 妻平湿原

自然保護センター 多田 雅充

六呂師スキーチャーのふもとにある0.5haほどの小さな湿原が妻平湿原です。平成2年に近くに福井県自然保護センターが建設されてからは、同センターの野外施設である自然観察の森の一部となり、訪れる人も多くなりました。

この湿原の見所は、何といっても初夏に純白の花を咲かせるミツガシワの群落です。リンドウ科のこの植物は、花はもちろんのこと端正な3枚の葉を広げた姿にも趣があります。

山側に向かって徐々に水深が浅くなり、それに応じて色々な植物群落がモザイク状に分布する様子は、湿原の成り立ちを理解する上でも格好の場所です。また、植物では、ミツガシワの他にもカキラン、トキソウ、ミズトンボ、モウセンゴケなどの珍しい湿原植物を観察することができます。動物では、オオコオイムシやマルタンヤンマなどの水生昆虫や近年ほとんど見ることができなくなってきた水鳥のヒクイナの記録があるなど数少ない水辺の自然として重要です。



オオコオイムシ

妻平湿原の花暦

植物名	4月	5月	6月	7月	8月	9月	10月
ミツガシワ	■	■	■	■	■	■	■
サワオグルマ		■	■	■	■	■	■
レンゲツツジ		■	■	■	■	■	■
トキソウ			■	■	■	■	■
コバギボウシ				■	■	■	■
ノリウツギ				■	■	■	■
カキラン			■	■	■	■	■
ヌマトラノオ				■	■	■	■
ヒメシロネ				■	■	■	■
サワヒヨドリ				■	■	■	■
ミゾハギ				■	■	■	■
コオニユリ				■	■	■	■

(福井県自然保護センターが1991年に行った調査のデータをもとに作成)



トキソウ



大昔の火口原 池の大沢湿原

自然保護センター 大沢 安一

池の大沢湿原は、大野市より南六呂師を経て、唐谷川の登山道を約3時間登った経ヶ岳の中腹（標高1340m）にあり、周囲をブナの原生林やチシマザサで囲まれた面積約0.4haの湿原です。登山道は整備されていますが、かなりの急登で途中数箇所にロープがつけられています。そのため、比較的訪れる人も少なく、湿原の周辺は自然の状態で現在まで保存されてきました。

この湿原一帯は、約100万年前に経ヶ岳が噴火した時の火口原であり、その後、土砂や泥炭が積もって湿原に発達しました。以前は相当な沼が形成され、様々な湿原植物が繁茂していたと想像されます。しかし、残念なことに湿原の一部は、陸地化が著しく、湿原という感じはなくなっています。

特に、登山道周辺は比較的乾燥し、草原へと変わりつつあります。ただ、湿原の中央付近には、小規模ながらミヤマホタルイ、ホソバミズゴケ群落が広がり、その西はヨシ群落になっています。さらに、県内では数少ないトキソウやシラヒゲソウが生育しており、湿原に花を添えています。シラヒゲソウ（白鬚草）は、写真のように花びらのふちが糸状に切れこんだ白い花を咲かせます。この花の感じが白いヒゲに似ていることからこの名前が付けられました。

また、ここは県内では初めてクロサンショウウオが確認されたところです。福井県では、奥越の山岳地帯の県境でのその分布が確認されています。



シラヒゲソウ



クロサンショウワオ



トンボが舞う 池ヶ原湿原

自然保護センター 多田 雅充

池ヶ原湿原は、勝山市の奥越高原牧場の北側にあります。この湿原は、牧草地造成のための工事で、一時はかなり破壊されました。昭和59年にふるさと公園として、県によって木道や休憩施設が整備され、湿原の様相を取り戻しています。地元の人は、昔からこの湿原を「葦田」と呼んで、かやぶき屋根や雪隠の材料にするために、毎年ヨシ刈りを行ったそうです。また、勝山藩の城主が、ここで菖蒲の花見をしたという記録も残っています。今では見られませんが、かつてはカキツバタなどが群生していたと考えられます。

周囲約1kmのこの湿原は、乾燥化のために東側と南側は2mを越すヨシが繁茂していますが、中央部は緑のじゅうたんを敷きつめたようにオオミズゴケが生えています。木道を歩いていくと、ランの仲間のトキソウ、カキラン、ミズチドリをはじめミカツキグサ、モウセンゴケなどの貴重な湿原植物を観察することができます。

湿原の一角には、周囲をヨシで囲まれた50m四方ほどの四角い池があり、水面にはヒルムシロ、水中には食虫植物のノタヌキモが繁茂しています。5月末から6月にかけて、この池はよいトンボの観察地となります。美しいコバルトブルーに身を包んだエゾイトトンボや体長30ミリほどの小さなアジアイトトンボが、周囲のヨシ原を中心に見られます。また、9月に入ると大型でルリ色に輝くオオルリボシヤンマのなわばり防衛や産卵を見ることができます。このトンボは大型のトンボの中では近くで観察できる種類で、その美しい姿や生命の営みである交尾や産卵を観察するには最適です。

そして、上空には避暑から帰って来たアキアカネが群れをなして飛び交う様子が見られます。このアキアカネが少なくなり始めると池ヶ原湿原にもまもなく冬が訪れます。



モウセンゴケ



オオルリボシヤンマ(清水典之氏撮影)



福井の高層湿原 赤池

自然保護センター 多田 雅充

県内ではただ一つの高層湿原として知られる赤池は、赤兎山（標高1,628m）の山頂より約1km東の高原（標高約1,580m）にあります。夏になればニッコウキスゲが咲き乱れるこの高原からは、雄大な白山山系が一望でき年間を通して多くの登山客が訪れます。

高層湿原とは高地にある湿原という意味ではなく、湿原全体が周囲よりも高くなってドームのようになった状態の湿原です。赤池のような標高の高いところでは、寒冷な環境のために植物の遺体が完全に分解せずに泥炭となります。この泥炭が堆積することによって、長い間にドーム状に盛り上るのです。ドームの上にはオオミズゴケが一面に生育し、その中に食虫植物として有名なモウセンゴケ、白い可憐な花を咲かせるイワイチョウやイワショウブが生えています。ドームの周囲は、池塘と呼ばれる水深20cmほどの池になっていて、浅いところにはミカヅキグサ、やや深いところにはミヤマホタルイの群落が形成され特有の自然景観となっています。

この湿原にはカオジロトンボ、ルリイトトンボ、ルリボシヤンマ、オオルリボシヤンマなどのトンボも生息しています。特にルリイトトンボとカオジロトンボは県内でも少ない高山性のトンボで、カオジロトンボは、ここが県内で唯一の生息地であるとともに国内の分布南西限にもなっているなど、赤池は学術的にも貴重な湿原です。



ニッコウキスゲ



イワイチョウ



カオジロトンボ(清水典之氏撮影)

湿原の昆虫たち



タガメ

ナチュラリストリーダー 福田 健

私たち人間の目から見ると、湿原で生活することはかなり困難なことのように思われます。しかし、現在およそ100万種類いるといわれる虫の中には、自分たちの生活空間を湿原に求めた仲間がいました。日本の湿地帯はほんのわずかですが、ここで生活をしている虫たちにとっては、湿地帯は天国なのです。ここには、トンボ・甲虫・チョウ・ガ・ウンカ・ガガンボ・ハチ・アブ・ハエ等の仲間が、にぎやかに暮らしています。ところで、日本では毎年、春になると国土の約7.5% (284万6千ha) の土地が湿地帯に変わってしまいます。この湿地帯は、私たち人間、特に日本人にとってではなくてはならないものですが、秋になるとなくなってしまいます。この湿地帯、いったい何だか分かりますか。実は田んぼのことです。田んぼには稻を食べるため害虫にされてしまった虫もいますが、稻を食べないトンボの仲間やタガメの仲間、ゲンゴロウの仲間などの姿も見ることができます。これから紹介する虫たちは、そのごく一部ですが、湿原の中でたくましく生きている姿を紹介したいと思います。

ウンコを背負うイネドロオイムシ



本当の名前はイネクビボソハムシといいます。この虫は、幼虫のときに外敵から身を守るために、自分で出したウンコを体の上に積み上げて敵の目をごまします。この姿が、泥を背負って歩いているように見えるためこの名前が付けられています。さながら忍者の使う土とんの術ならぬ、うんとんの術?といったところでしょうか。

ところが、成虫になると幼虫のときか

らは想像もできないほどの美しい姿に変わります。体の大きさは4~5mmほどの小さな虫ですが、胸は細く黄褐色で、はねが青藍色に輝くたいへんきれいな甲虫です。幼虫は、5月下旬頃から7月中旬にかけて見られ、成虫は6月下旬頃から見られるようになります。この虫は、生まれてから死ぬまで稲の葉を食べ続けます。

アメリカからやって来たお米好き

昭和51年に、愛知県の田んぼで稲の葉を食べている見なれないゾウムシの仲間が見つかりました。この虫は、アメリカのカリフォルニア州の出身なのですが、なぜか日本のお米を食べに私たちの国まで、はるばる太平洋を越えてやって来てしまったのです。昭和60年には、北海道を除いてほぼ日本中で見られるようになりました。この虫には、イネミズゾウムシ（稻水象虫）という名前が付けられました。

幼虫のときには、稲の根などを食べて大きくなり、約1ヶ月ほどで成虫になります。親になったこの虫は、やわらかい稲の葉を食べ続け、稲を枯らしてしまうことがあります。アメリカでは、湿地帯に生えているイネ科の植物を食べて暮らしていく、稲はほとんど食べないようです。



これはウソ!!

中国大陆からやって来る虫

昭和42年10月11日の夜、潮岬南方500kmの地点で気象観測をしていた定点観測船「おじか」の船上の灯をめがけて小さな虫の大群が飛来しました。このときの様子を当時の観測員は、まるで雪が降ってくるようだったと書き残しています。このときの虫は、ウンカ（浮塵子と漢字では書きます）の仲間であるセジロウンカとトビイロウンカの2種類でした。ウンカを研究している人たちの間では、この虫がある時期になると突然にたくさん出現するため、中国大陆から飛んで来るのではないのだろうかという予測がされていました。このときから海の上での調査が続けられました。その結果、中国大陆で生まれたウンカたちが、初夏から秋にかけて季節風にのって日本までやって来るということが確かめられました。ウンカの仲間は、セミのような口をもっていて稲の茎から栄養分を吸い取ります。また、排泄物は未消化であるためにカビ等が発生して稲の成育を遅らせたり枯らす原因になっています。

田んぼで育つ赤トンボ

日本に住んでいる赤トンボの仲間は、今のところ20種類ほどいるといわれています。その中で、いちばん目につくのがアキアカネです。6月の初め頃成虫になったアキアカネは、生まれ故郷を離れ山地に旅立ち、9月の終わり頃まで山で過ごします。これは彼らが、夏の暑さをきらって山の上に避暑に行くためだといわれています。7~8月に、高い山の尾根道や山頂などで群れをなして飛んでいる



赤トンボの大半はアキアカネです。ただ、この頃の彼らの体の色はうすいオレンジ色をしているので赤トンボらしくありません。体が赤くなり故郷の田んぼの稻が実る頃になると、初秋の涼しい風に誘われるよう群れをなして山を降りて来ます。中には同じ個体が、100kmも離れたところで再び確認された例もあります。

湿原の生きた宝石



平地の湿原に繁茂するシロネと呼ばれる植物には、まるで宝石のようにきれいな虫が住んでいます。オオルリハムシとよばれるこの虫は、体の大きさが2cmほどで決して大きなほうではありませんが、ハムシとよばれる仲間のうちでは最大のほうです。

オオルリハムシには日本海型と太平洋型といわれる2種類のタイプがあります。日本海型といわれるタイプは、その名前の示すとおりに体中がルリ色に輝いています。また、太平洋型といわれるタイプは、赤みがかった褐色にエメラルドグリーンのふちどりがあります。その美しさには、湿地帯の王様という風格があります。

が、残念なことに住んでいるところが限られているために、私たちの目にとまりにくい虫のひとつです。福井県では、以前に1頭だけ福井市で見つかったことがあります、その後にはまだ記録がありません。どなたかこの虫を見つけだしてくれませんか？

水の中でくらすの仲間たち

チョウやガの仲間を鱗翅目とよいますが、水の中で生活することができる的是ミズメイガとよばれるガの仲間たちだけです。ただし、水の中で暮らすことのできるのは、幼虫だけです。この仲間は、30種類ほどが日本では見つかっています。彼らは、湿原・池・川等のコウホネ・ミツガシワ・スイレン・ヒルムシロといった水草やコケ等を食べて育ちます。

幼虫は、食物を繰り合わせたベッドの中でこれを食べて成長します。私たちの身近なところで見ることのできるこの仲間では、稻等を食べるイネミズメイガやコウホネ・スイレン等を食べるマダラミズメイガ、ヒルムシロ等を食べるギンモンミズメイガ等がいます。いずれの成虫も体の大きさが1cmほどですが、なかなか美しい仲間たちです。



ギンモソミズメイガ

高山の湿原で花開くトンボの恋愛

トンボの仲間たちは、大人になるとたいへんな恋愛好きに変身します。大人になってから死ぬまで、一人の相手だけでは飽き足らずに結婚・離婚を繰り返します。これは、できるかぎり自分の遺伝子をより多く残すための行動だと考えられています。

マーキング法（トンボの翅や胸に、印を付けて個体を識別する）によって産卵行動を観察していたとき、ある1頭のメスは1日（約7時間ほどの間に）のうちに3度結婚をくり返したことがあります。単純に計算をすると、大人になってから1カ月間生きたとすればこのメスは、3回×30日=90回結婚したことになります。どうも私たちには、まねのできない結婚歴といえそうですね。

また、オスの場合はなわばりを作って結婚のための準備（テリトリーともいわれ、メスを確保するための空間で、私たちの家や土地にあたるものでしょうか）をします。オスにはメスが運くなわばりの中を訪れてくれたときにしか結婚ができません。このなわばりを作り守りぬくために、オスは常に戦わなければなりません。だれかが自分のなわばりの中に入ってくると、すぐに飛んで行って自分の結婚相手以外のものには「ガン」をとばします。トンボの目玉

が大きいのはこのためではないのですが、それでも中に入っこようとするものには体当たりをします。これでもだめなときは、相手につかみかかって噛みつくこともあります。（1990年7月に北潟湖畔でなわばりのバトロールをしていたギンヤンマのオスが、同種のオスの胸に噛みついで飛べなくなるほど大けがを負わせた例を一度観察したことがあります。）

同じ種類のオス同士のなわばり争いでは、先にいたものが強く、後から来たものに奪われるということはありません。ただし、種類の違うオスの場合には後から来た大型（強い）のトンボに取られてしまうことがあります。オスにとっての結婚は、命がけであり毎日が傷だらけのつらい日々なのです。

湿原には、まだまだたくさんの仲間たちが住んでいます。そして、ここに紹介出来なかった仲間たちもいつの日か、みなさんが元気な声をかけてくれるだろうと心待ちにしています。フィールドの仲間たちは、彼らの家の扉をノックした人には必ずほえみを返してくれます。さあ虫メガネを持って、元気よく「インセクト・ウォッチング」に出かけてみませんか？

（ふくだ けん 坂井郡三国町4-8-38）



ルリボシヤンマ（産卵中）

湿原の植物

ナチュラリストリーダー 松村 敬二

湿原の植物は陸の植物に比べて、根、茎、葉の細胞の間隔が広く、地下茎に通気道があり呼吸しやすい構造になっているので、特定の植物が群生します。また、水によって花粉や種子が運ばれたり、粉のような種子が泥と一緒に水鳥の体について運ばれるので広く分布します。



ミズバショウ（サトイモ科）

雪解け水や涌水が年中流れている湿地に生育しています。早春真白い仏炎苞^(注1)をつけ花穂を守ります。夏の葉は1mにもなります。水辺に生えバショウ^(注2)の葉に似ているところからこの名がついています。

花期 5月中

取立山（勝山市）、林谷（和泉村）



ザゼンソウ（サトイモ科）

日本海側の多雪地帯の湿地に生育する植物です。早春茶褐色の花弁のような仏炎苞をつけ花穂を守ります。その形が座禪僧の姿に似ているのでこの名がつけられています。少し悪臭があります。

花期 4~5月

奥越の山間



ミツガシワ（リンドウ科）

高地の池や湿原に生育する植物ですが、第四紀氷期の生き残り^(注3)ですから池ノ河内の低湿地にも生えています。三枚の小葉が家紋の三つ柏に似ているところからつけられた名前です。

花期 5月中

妻平（大野市）、池ノ河内（敦賀市）



リュウキンカ（キンポウゲ科）

清涼な水が年中流れる湿地に生育しています。太い茎の上に黄色の花を多数つけ湿地を埋めつくしている様は見事です。和名「立金花」は茎が立ち、金色の花を咲かせているところから名づけられたものです。

花期 5月中

小原峠（勝山市）

サワラン（アサヒラン）（ラン科）

高地のミズゴケ湿原にまばらに生育している貴重な種です。根に球根のようなものがある、1花茎と1葉を出し紅紫色の花を横向きに咲かせます。名は沢に生える「沢蘭」と旭日に咲く「旭蘭」があります。

花期 6月中

北谷（勝山市）池ノ河内（敦賀市）



ニッコウキスゲ（センティカ）（ユリ科）

高地の湿原に金色のユリのような1日花が咲きます。茎頂に3~4個のつぼみをつけ順番に咲きます。名は日光の湿原に咲くキスゲという意味を表し、座禅をするような庭に咲く花から禅庭花とも呼ばれています。

花期 7月中

赤兎山（大野市）
夜叉ヶ池（今庄町）



ミズチドリ（ジャコウチドリ）（ラン科）

湿地に1m前後の茎を伸ばし白く小さい花を穂状に咲かせます。名の由来は水生地に生え、花の形がチドリソウに似ていることと、匂いがジャコウソウに似ていることです。県内では池ヶ原湿原にしか生育しない貴重なもので。

花期 6~7月

池ヶ原湿原（勝山市）



ミゾソバ（ウシノヒタイ）（タデ科）

川辺に群生し、茎は地面を横にはって先の方で高さ1m前後に立ち上ります。花は白から淡赤色まであります。名はソバに似て溝にそって生えることと、葉形が牛の額に似ていることに由来します。葉形は生長とともに変わります。

花期 9~10月 濡地のいたる所

(注1)苞=「ほう」とは芽や花を包むもの、仏像の後の光を出

している後背に似ているのでつけられたもの

(注2)バショウはバナナに似ている南方の植物

(注3)1~2万年前に寒い時代があり、その時代には低湿地まで分布していた植物



あとがき

「ふるさと福井の自然 第6号」をお届けします。

身近にあって、ふだんは気にもとめないけれど、私たちの生活になくてはならないもの……。自然とは、そのようなものかもしれません。この冊子をとおして、私たちのふるさと福井には、すばらしい自然があることに気付いていただければ幸いです。

なお、今後の参考にさせていただきたいと思いますので、ご意見ご要望がありましたらお寄せください。

一目 次一

表紙 池の河内阿原ヶ池	1
はじめに	2
湿原の移り変わり	3 松村敬二
福井の主な湿原	
すてきな池ノ河内	4 柴田亮俊
昆虫類から見た池ノ河内湿原の重要性	8 宮武頼夫
妻平湿原	10 多田雅光
池の大沢湿原	11 大沢安
赤池	12 多田雅光
池ヶ原湿原	13 ハ
湿原の昆虫たち	14 福田 健
湿原の植物	18 松村敬二
あとがき	20

ふるさと福井の自然（第6号）

平成4年3月発行

編集・発行 福井県自然保護センター

〒912-01 大野市南六呂師169-11-2

TEL (0779) 67-1655・1656

印刷 朝日印刷株式会社

この冊子は福井県自然保護基金によって作成されました。

